

『トマスによる福音書』についての覚書 大田俊寛

昨年私は、『グノーシス主義の思想——（父）というフィクション』という書物を上梓した。この書物は、グノーシス主義のさまざまな文書を分析し、その特質の解明を目指したものである。しかし同書では『トマスによる福音書』（以下「トマ福」と略記）についてまったく触れられておらず、そのことを怪訝に感じた読者もいるに違いない。実を言えばトマ福は、その高い知名度にもかかわらず、ナグ・ハマディ文書に収められた諸文書のなかでも、もつとも扱いの難しい文書の一つなのである。そこで『グノーシス主義の思想』の欠を埋めるためにも、ここにトマ福についての簡単な私見を記しておくたい。『グノーシス主義の思想』においては、グノーシス主義に関する先行研究が、文献学とロマン主義という二つのアプローチに大別されるといふことを指摘した。ゆえにここでも、その二つの観点から論を進めることにしよう。

「Q資料」の实在を証明？（文献学的関心）
ナグ・ハマディ文書の解析を行った研究者た



ちの多くは、西洋古典を扱う文献学者、なかでも聖書学の専門家であったのだが、彼らが特にトマ福を重要視したのは、近代聖書学において唱えられている「Q資料」仮説と強い関係性を持つている。すなわち、マルコ、マタイ、ルカという三つの共観福音書のなかで、マルコが最初に成立し、マタイとルカは、先行するマルコの記述に依拠していることが想定される。しかしマタイとルカは、マルコ以外に別の資料にも依拠しており、それはイエスの語録資料だつたのではないか、というのが、いわゆるQ資料仮説である。この仮説は、一九世紀に提出されて以降、さまざまな議論を呼びつつも、近代聖書学にとってきわめて重要なものとなった。そして、新たに発見されたトマ福では、使徒トマスによつて書き記されたイエスの語録集というスタイルが採用されていたため、Q資料仮説に賛同する聖書学者たちは、これはQ資料の实在を証し立てるものである、あるいは少なくとも、Q資料のような「イエスの語録資料」が継承されてきたことを示すものである、と捉えたので

ある。このような見解はアメリカの聖書学者たちにはしばしば見られるものであり（クロッペンポルグ他『Q資料・トマス福音書』日本基督教団出版局）、Q資料とトマ福を生み出した信仰共同体の存在を想定したり（マック『失われた福音書』青土社）、Q資料とトマ福から、史的イエスが語った言葉を再構築しようとする試みる（クロッペン『イエスの言葉』河出書房新社）研究者もいる。しかしながら、トマ福とQ資料を積極的に関係づけようとするこうした主張は、それほど説得力のあるものとは言い難い。その理由はまず、トマ福の成立年代は、現存する資料から判明する限りでは、二世紀後半までしかさかのぼれず、Q資料が成立したはずの時期（一世紀中頃？）から百年近くの開きがあるということである。さらに、そもそもQ資料仮説の第一の要諦とはマタイ、ルカの両福音書が、マルコ以外に共通して依拠している資料が存在する、という点にあり、それが「語録」資料であるかどうかは、むしろ二次的な問題であつたはずである。しかしトマ福には、マタイ、ルカのみならず、マルコとも共通する文言が数多く含まれている。それでもトマ福はイエスの語録資料なのだから、Q資料と何か関係があるはずだ、という主張は、議論として無理があると言わざるを得ない。現に、荒井献を始めとする日本の聖書学者たちは、上述のアメリカの研究者たちの主張に対し、概

して批判的である。

日本においてトマ福が広く知られるようになったのは、荒井の『トマスによる福音書』（講談社学術文庫）という著作が果たした役割が大きい。この著作は、ナグ・ハマディ文書発見の経緯やグノーシス主義の思想的性質について概説された上で、トマ福の全文に詳細な注解が加えられた労作である。しかしながらその内容について、ある問題を指摘しないわけにはいかない。それは荒井が、トマ福の思想がグノーシス主義であるということ、やや一義的に決めつけすぎているという点にある。トマ福には一四のイエスの言葉が収められているのだが、そのすべてが明確にグノーシス主義的な性質を帯びているわけではない。まず何より、先述したようにトマ福には、三つの共観福音書と共通する文言が多数含まれており（分量として三分の二程度）、もちろんそれら自体はグノーシス主義に属するものではないからである。さらには、それぞれの語録がかなり短いものであることもあり、私にはトマ福のなかには、疑う余地なくグノーシス主義的であると断言できるような語録は一つも収められていないと思われる。トマ福に収録された断片的で謎めいた言葉の数々から、著者の思想や世界観の全体像を想定するのは、実はきわめて困難なのである。この点に関して荒井は、トマ福がグノーシス主義の文書で

あるということをお大卒において前提し、それに基づいて各語録を注釈するという試みを行っているが、その記述がしばしばかなりの強引さを感じさせるものになっているというところは、否定するのが難しいだろう。

グノーシスは禅？（ロマン主義的関心）

謎めいた数々のイエスの言葉によって構成されたトマ福のスタイルは、研究者たちを苦惱させる原因となっている一方、この文書の大きな魅力となっていることも確かだろう。すなわち、イエスの言葉の隠された真意を何とかして読み取るという、「謎解き」の誘因がそこに存在するのである。トマ福の著者もそれに自覚的であり、この文書の冒頭には、「この言葉の解釈を見出す者は死を味わうことがないであろう」という挑発的な文句が記されている。

トマ福のこのようなスタンスは、宗教のなかに「何か深遠なもの」「何かエキゾチックなもの」を見ようとする、ロマン主義者たちの関心を引きつけることになる。その一例としてここでは、佐藤研『禅キリスト教の誕生』（岩波書店）を挙げておこう。佐藤はこの著作の第7章「禅とグノーシス主義」において、グノーシス文献にしばしば見られる否定神学の記述に注目し、現世を超越した否定性のうちに神的叡知を求めようとする姿勢が、禅と共通のものである

と指摘する。佐藤によれば、両者は共に「非限定的・一元的実相把握の体験」をその根拠としているのである。続く第8章『トマス福音書』と禅』においては、トマ福のなかのいくつもの語録について、それは論理的には矛盾ないし不可解としか言えない言葉であり、禅の公案に似たものと論じられる。そして佐藤は、「まだ成熟に達していないグノーシス主義者は、その中の一つひとつと瞑想的に取り組むことによって、何よりもその背後の至高者の真理にまで体験的に突入することが目されているのではないであろうか」（二七六頁）と推測する。しかしながら佐藤によれば、禅において、現象の「空」性を自覚した後、主体と客体の分裂を再び一元化することが目指されるのに対して、グノーシス主義では、現象界を捨て去ることが目指されるという相違が見られる。そしてこの点においてグノーシスは、「未完成の禅」「失敗した禅」と評価しなければならぬ、というのである。

グノーシスと禅を比較し、両者に共通性を見出す試みについて、佐藤は自ら「さほど根も葉もないものではない」と述べているが、率直に言って私には、単なる空虚な幻想にしか思えない。佐藤の議論は「分からないもの」を別の「分からないもの」と比較することによって説明しようとする無理な試みであり、さらにはその比較の結果として、両者はその目指すところ

が根本的に違うというのだから、この分析によって結局のところ何が明らかになったのか、きわめて不分明であると言わざるを得ない。具体的に問題があると思われる点を一つ挙げておけば、トマ福の語録七七についての解釈である。この語録には、イエスが自らを「すべての上にある光」であるとし、すべてのものは自分から出来た、ゆえに木や石のなかにも自分が見出されるだろう、という内容が語られている。その発想は、自然物を含む万物は、「光あれ」に始まる神の言葉に由来し、その言葉（ロゴス）とはキリストのことであるとすると、ヨハネ福音書の観念に依拠したものであり、キリスト教正統派の見解と取っても、あるいはロゴス＝キリスト論を積極的に取り込んだグノーシス主義の見解と取っても、それほど理解することが難しくない。ところが佐藤はこの句に対して、ある箇所では、グノーシス主義は現世を否定するはず

なのだから、このような見解は非グノーシス的である、と言ったかと思えば（一六六頁）、別の箇所では、論理的に不可解な命題をあえて提示する「グノーシス派の公案」の代表例として扱っていたりもする（一七五頁）。先述したように、確かにトマ福には謎めいた文言が数多く含まれているのだが、それでも無理なく読解できると思われる語録も少なくない。しかしながら、禅との共通性を指摘することに急ぐあまり、テキストが謎めいたものであることをより強く印象づけかねない混乱した議論を展開することは、いささか慎重さを欠くと言わざるを得ないのではないだろうか。

また、『禅キリスト教の誕生』全体の主張についても、多分に懸念すべき点がある。キリスト教精神を賦活するために、禅や神秘主義に見られる「宗教経験」を活用しよう、そしてそのために、これまで排斥されてきた異教や異端の知恵を再評価しようという試みは、数々のロマン主義者たち、なかでも心理学者ユングによって提唱されたことであつた。そもそも佐藤も触れているように、グノーシスは禅であるとする発想が最初に見られるのは、クイスペルと秋山さと子という二人のユング派の議論においてである（ヨナス『グノーシスの宗教』人文書院、訳者あとがき）。このようなユング心理学の発想は、戦後アメリカのいわゆるニューエイジ思想や、ヒューマン・ポテンシャル運動に流れ込み、そこから生まれた自己開発セミナーという集団療法の手法は、牧師の再教育のための研修会を契機として日本にも導入されたのである。その経緯や末路については、福本博文『心をあやつる男たち』（文春文庫）を参照していただきたい。佐藤の提唱する「禅キリスト教」は、遅れて来たニューエイジ思想とでも呼ぶべきものであり、何か新しいものでは決してないのである。

広

告

ス

べ

ー

ス

イエスは何と語ったのか——開かれた問い

これまでの話を整理すれば、トマ福は、Q資料と関係があるかどうか不明であり、その思想が厳密にグノーシス主義的と呼べるかどうか議論の余地があり、禅の伝統とはまったくの無関係である。それでは結局のところ、トマ福とはどのような文書なのだろうか。

これまでの錯綜した議論をいったん度外視し、トマ福がおそらく二世紀の後半に成立した文書であるというシンプルな想定に立ち帰るとすれば、このような文書が生み出されるに至った動機は、比較的容易に理解することができると思われる。当時の社会では、後に「正典」や「外典」に分類されることになる、多数の福音書が流通していた。そしてこうした状況において、多くの福音書で描かれるキリスト像のなかで果たしてどれが本当なのか、また結局のところイエスは何と語ったのかという、率直で素朴な問いが持ち上がるということは、ごく当然であっただろう。この問いをめぐる、グノーシス主義やマルキオン派といった諸異端が活発な思索を展開する一方で、キリスト教の初期教父たちは、彼らに対する論駁を行った。すなわちマルキオンは、ルカ福音書を唯一の正典とみなす見解を示し、教父エイレナイオスはそれに対抗する仕方、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四文書

が正典と見なされるべきであるという主張を打ち出した。そしてグノーシス主義は、旧約と新約を含む聖文書においては「真理」の言葉と「見せかけ」の言葉が混在しているという考えから、既成のテキストを切り裂いてそこから真理の言葉を摘出し、新たな聖典を紡ぎ出そうとする、波乱に満ちた試みへと乗り出していったのである。

イエスは何と語ったのか——トマ福は、この問いに対して、もつとも正面から答えようとした文書であると捉えることができるだろう。そしてこの試みに対し、直接間接を問わず、グノーシス主義やマルキオン派の思想が影響を与え、それを後押ししたのであることは、容易に想像されることである。特に、既存のテキストを切り裂くその手法は、やはりグノーシス主義に属するものであると見なすべきかもしれない。しかしながらトマ福の試みは、複雑多岐にわたるグノーシス主義の活動のなかでも、やや「例外」に当たるものであった。というのは、グノーシス主義が主に関心を示したのは、さまざまな福音書のなかでも、形而上学的色彩の濃いキリスト像を示したヨハネ福音書に対してであった。共観福音書の描くイエス、特にその「たとえ話」については、ほとんど関心を示さなかったからである。トマ福は、グノーシス主義の思想的枠組みによってイエスのたとえ話の真意を

探り出そうとしたものの、やはりグノーシス主義の高度に形而上学的な世界観と、イエスのいささか土臭い、民衆的生活感にあふれた語り口のあいだには、適切な接点を見つけたことができなかった。ゆえにこうして生み出されたテキストは、いささか性格の不明瞭なものにならざるを得なかった。しかし逆説的にもそのことが、トマ福という文書の謎めいた性質をいつそう際立たせることになった——やや斜に構えた見方であるが、このような経緯が実情なのかもしれない。

エイレナイオスが正典福音書を四つに指定したことは、イエスは何と語ったのかという、魅惑的でありながら実は危険な問いを、巧みな仕方ペンディングしたものと捉えることができる。なぜならこのやり方によれば、イエス像は一定の範囲内に収束しながらも、決して一つの固定した焦点に結ばれることがない、すなわち、信仰の外縁を示しつつ内的ダイナミズムを維持することができるからである。そしてトマ福の存在は、この問いが究極的には「オープン・エンド」の状態のまま、数千年にわたって存在してきたこと、そしてこれからも存在し続けるであろうことを示すものなのである。